

山岸文庫蔵『公条本源氏物語』

——解題ならびに「帚木・空蟬」影印——

横井 孝

一 まえがき——〈公条本〉への道

実践女子大学図書館に収められる山岸徳平博士旧蔵本の中には『源氏物語』関連の写本として、伝称明融等の筆写によるいわゆる〈明融本〉の存在が知られており、東海大学図書館の桃園文庫蔵本と併せてすでに諸家による検討が進みつつある。次いで、青表紙本・河内本間の位置づけと成立の問題で話題となる〈畊雲本〉も、甘露寺親長の筆写にかかる一本が山岸文庫に蔵されており、上野英子によって本誌『年報』第一五号（一九九六・三）に概要が紹介された（調査報告四九「山岸文庫蔵『畊雲本源氏物語』解題」）。いずれも『源氏物語』諸本群の中にあって独自の地位を占める重要な写本であることが確認されている。

しかし、同じ山岸文庫に〈公条本〉と称する『源氏物語』写本二五冊を蔵することは未紹介であった。山岸博士が旧版の岩波古典文学大系『源氏物語』五巻を校訂する際に校異欄に「堯空説書入公条本」とのみ記して用いたが、詳細は未公

開のままであった。ただし、一九九五年一〇月七日から二七日の二〇日間、図書館と文芸資料研究所の共同企画によって開催された「実践女子大学所蔵資料展・物語を読む——源氏物語から狭衣物語へ」において、〈明融本〉〈畊雲本〉などとともに〈公条本〉も展示され、そのパンフレットに口絵写真つきで公開された。

『源氏物語大成』がその後の本文研究の進展を底支えた成果の大きさは今更論ずるまでもなく、またそのほとんどの帖の底本〈大島本〉をはじめとする諸本の影印や翻刻が公刊された現在においても過去の遺物となつてはいるが、刊行にあたって時代的・物理的制約が小さくなかったことは容案に推測できることであるし、かつまたそこに採用されなかった諸本にも閑却しえない重要な本文が存することもすでに諸家の論ずるところであった。山岸文庫の〈明融本〉〈畊雲本〉の紹介がその例を示しているはずである。そして〈公条本〉もまた紹介されるべき時期に至りつつあることを痛切に感じるのである。

稿者・横井は、青表紙本系統の諸本の位相を検討するにあたって『源氏物語』の本文をいくつかの巻における形容詞のウ音便における現象を通して分析したことがある（『源氏物語青表紙本の本文管見——ウ音便をめぐる基礎作業について』の報告）『静岡大学教育学部研究報告』人文・社会科学篇、第四八号、一九九八・三）。『源氏物語大成』所収本の範囲では、総角の巻は青表紙本を含む諸本が音便化しており、ひとり底本の大島本のみが非音便形であることが多く、大島本の孤立的現象と見えたのだった。しかし、『大成』に未採用であった〈明融本〉〈公条本〉を調査の対象に加えてみると、これが大島本と非常に近接することがデータを通して証明できたのである。形容詞ウ音便という限定的な窓ではあるが（当該稿では触れなかったが、助動詞などのウ音便もすでに調査済みで同様な結果を得ている）、少なくとも総角の巻には青表紙本はA・Bと呼ぶべき二グループの本文に分岐する眺望を見せ、大島本と〈明融本〉〈公条本〉とがひとつのグループとしての纏まりのあることを示したのであった。循環論法めくが、大島本と〈明融本〉〈公条本〉とは相互にその『源

『氏物語』一写本としての価値を保証し合うところがある。しかも右の調査において、Aグループたるこの三本が音便化する場合、Bグループを含む他の諸本は、河内本・別本を含めてほぼ例外なく音便化している現象もあつた。大島本と『明融本』の検討はすでに着手されて久しい。いま『公条本』の紹介が急務と感ずるゆえんである。

二 実践女子大学蔵山岸文庫蔵〈公条本〉源氏物語・書誌

1 〔概要・寸法等〕

写本。二五冊。梔子色無地楮表紙。縦二九・九糎、横一九・一糎。

2 〔題簽〕

題簽なし。表紙中央に打ち付けに所収卷名を墨書するが、本文とは別筆。表紙右上に当該冊に収められる巻序を記す。

3 〔蔵書印〕

① 第一冊「桐壺」表紙右上に縦七・九糎、横二・一糎の紙片を貼付。「物語日記／第拾参号」と墨書。表紙右裾に縦五・〇糎、横四・四糎の紙片貼付。単郭陽刻朱印「青木／印」。印影上部余白に墨書「二千／八百／二（朱ミセケチ）拾／六号」。印影内「印」字下に墨書「廿五冊」。青木信寅の蔵書印である。朝倉治彦『蔵書名印譜』（臨川書店、一九七七・一二刊）によれば「司法省。名古屋の人。齋宮、左源次と称す。古筆了仲門人。函館控訴院裁判長。明治十九年九月二十四日歿」とある。

② 各冊前遊紙オ、右裾に双郭陽刻朱印「山岸文庫」。

③ 同じく前遊紙オ、左裾に単郭陽刻朱印「松方／文庫」。松方巖の印。松方巖は第四代総理大臣松方正義の長男。『昭

和九年版人事興信録』（人事興信所、一九三四・一〇刊）によれば、第十五銀行頭取・帝国倉庫運輸会社社長・泰昌銀行頭取などを歴任し、一九二七（昭和二年）の第十五銀行破綻に際して一切の公職を辞した。

以上を要するに、次のような伝流経路の次第が考えられる。

□……………青木印……………松方文庫……………山岸文庫……………実践女子大学図書館

4 〔料紙・本文〕

料紙・楮紙。虫損がかなり存する箇所あり、表紙とともに一九九五年（平成七）に全丁裏打ち補修済。本文本行一面一〇行（第一八冊「夕霧」のみ一行）。本文は青表紙本系統（第六冊「花散里」は河内本系統）だが、後になんの特徴的部分を例示する。

墨筆の書き入れ注記多く、朱筆の合点・句点も全冊に散在する。書入れについては節を変えて別に述べたい。注記の肩付・出典表記には「河（河海）」「花鳥」「細」「堯（堯空）」「紹永説」「宗（宗聞）」「源語（源吾）」「文」「孝」「コ」或「説」等々が見える。

5 〔表紙原態〕

第二二冊（収・螢く野分）の常夏巻頭二一オの四冊に表紙痕跡。原装は栗革表紙かと思われる。第一九冊（収・幻く竹川）・竹川巻頭五九オにも同様な表紙痕跡あり。但し、例えば第七冊は須磨・明石の巻を収めるが、虫損が両巻に跨る丁に連続している例も他に見え、原装五四冊であったかの推定が成り立つか否かは微妙な問題。

6 〔表紙裏書〕

一九九五年の補修作業の直前、現行表紙に墨筆による裏書の（第八冊を除く全冊に）存することが確認された。現在は補修作業が完了したためこの裏書を直接確認することはできなかったが、カラー撮影した写真が文芸資料研究所に蔵

されている。全体的にやや拙く大ぶりの文字で書かれており、目録などの習書のごとく見える。以下□は切断された文字の一部などで読みにくい箇所を示す。判読しうる部分には枠内に記入しておいた。

第一冊・表表紙「□馬」。

第二冊・表表紙「一匹」。

第三冊・表表紙「御御／索軸軸」（字ヲ削ッタ痕跡）／夜叉竹*（「索」字の二画か）麁」。

第四冊・表表紙「進上／蓮飯」。

第四冊・裏表紙「上／太刀 一腰」。

第五冊・表表紙「上／松たいら伊予守」。

第五冊・裏表紙中央「い上」。

第六冊・表表紙に文字残画（「上」か）。

第六冊・裏表紙「御馬 一匹／以上」。

第七冊・表表紙「上」。

第九冊・表表紙「進上／御太刀 一腰」。

第九冊・裏表紙「以上」。

第一〇冊・表表紙「御馬 一匹／以上」。

第一〇冊・裏表紙「進上／（文字残画）」。

第一一冊・裏表紙「御菓子／（文字残画）」。

第一二冊・表表紙「ん上」。

- 第二冊・裏表紙「白銀 拾両／ 以上」。
- 第三冊・表表紙「松たいら越前守」。
- 第三冊・裏表紙「御鏡餅 一重」。
- 第四冊・表表紙「しん上」。
- 第四冊・裏表紙「進上／ 夜叉竹軸御筆」。
- 第五冊・表表紙「松□」。
- 第五冊・裏表紙「ん上」。
- 第六冊・表表紙「上／太刀 一腰」。
- 第六冊・裏表紙「い上」。
- 第七冊・表表紙「以上」。
- 第七冊・裏表紙「□荷□」。
- 第八冊・表表紙「進上／ 蓮飯」。
- 第八冊・裏表紙「ん上／んふ 一はこ」。
- 第九冊・表表紙「御太刀」
「一腰」。
- 第二〇冊・表表紙「上／八角豆 一箱」。
- 第二冊・表表紙中央「以上」。
- 第二冊・裏表紙「ん上」。
- 第三冊・裏表紙「上／□一はこ」。

第二三冊・表表紙「進上／葛粉」。

第二三冊・裏表紙「一おり」。

第二四冊・裏表紙「太刀 一腰」。

第二五冊・表表紙中央「進上」。

7 「奥書・識語」なし。

第一冊目裏表紙の見返しには本文の共紙が貼付してあるが、補修前に貼り込んである左裾裏側に「二五冊 古写本／入ヲ▽」と小文墨書のあることが発見された。

8 「筆跡分類・試案」

本文は一筆ではない。〈公条本〉の寄り合い書きたることを理解する前提としての試案を提示しておきたい。あくまでも試案、ひとつの叩き台に過ぎないことをご承知おき願いたい。

I類……桐壺（冒頭／一五丁・一八／二六丁）・夕顔・花宴・葵・霽標・松風・薄雲・篝火・常夏・梅枝・柏木・匂宮・総角

II類……桐壺（一六／一七丁）・空蟬・末摘花・花散里・蓬生・閑屋・玉鬘・野分・藤袴・横笛・紅梅・早蕨・宿木・夢の浮橋

III類……帚木・若紫・榊・朝顔・初音・螢・真木柱・藤裏葉・夕霧・幻・竹河・東屋

IV類……紅葉賀・須磨・明石・乙女・胡蝶・御幸・若菜上・若菜下・鈴虫・御法・橋姫・椎本・蜻蛉・浮舟・手習
桐壺の巻が基本的にI類の筆跡であるのに対して、二丁分II類の筆跡が混在しているのが眼を惹く。一五ウ最終行「…人めをおはしてよるのおとゝに」（『源氏物語大成』一八頁⑥行目相当）とあり、一六オ第一行頭「いらせ給てもまと

ろませ給こと……」と連続するので問題はないが、Ⅱ類の筆跡が終わる一七ウ最終行には「(はゝ) 君なくてたにらう
たうし給へとて弘徽殿（なと）と」(『大成』一九頁⑬行目相当、傍線・稿者)とあり、次の一八才第一行頭に「（なと）にもわた
らせ給……」とあるのと波線部が重複している。これは桐壺の巻においては、Ⅱ類の筆跡箇所が補筆であったことを推
定させる一証であろう。

ただし、桐壺の一六〇一七丁と同筆跡の他の巻とこの事実がどう相関するのか。Ⅰ類の諸巻が先に書写され、後にⅡ
類の諸巻が写された、とする時間差を考えるべきか、あるいは、ほぼ同時並行に作業が進行し、Ⅱ類の筆跡の持ち主が
修正・補筆をおこなったとみるべきか。筆者の推定の課題とともに、問題を提起しておく。

9 「各分冊情况」

各冊合綴の状態は以下の通り。墨付・前後遊紙数を合計した数が全体と合致しない場合は巻間の遊紙があることを示す。

4	3	2	1	巻名	丁数	墨付丁数	前遊紙数	後遊紙数
紅葉賀 末摘花	若紫 夕顔	空蟬 簪木	桐壺		二八	二六	一	一
二六 三二	四二 四二	一三 四四	二八		二六	二六	一	一
二六 三一	四一 四一	一二 四三	二六		二六	二六	一	一
ナシ	一	一	一		二六	二六	一	一

8	7	6	5	巻名	丁数	墨付丁数	前遊紙数	後遊紙数
蓬生 霽標	明石 須磨	花散里 神	葵宴		二八	二六	一	一
二五 二八	四〇 四二	六 四四	三八		二六	二六	一	一
二四 二六	三九 四〇	五 四三	三八		二六	二六	一	一
一	一	一	一		二六	二六	一	一

14	13	12	11	10	9
梅 真 枝 木柱	藤 御 袴 幸	野 篝 常 分 火 夏 蛩	胡 初 玉 蝶 音 葛	乙 朝 女 顔	薄 松 絵 関 露 風 合 屋
一 三 八 六	一 二 六 八	二 六 六 二 〇 六 六 二	二 一 四 〇 一 六 〇	四 二 六 二 一	二 二 一 八 五 〇 一 八
一 三 七 五	一 二 六 七	二 五 五 一 〇 五 五 九	二 一 三 〇 一 五 九	四 一 六 九	二 一 一 七 四 九 一 七 六
一	一	一	一	一	一
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	一

22	21	20	19				18	17			16	15	
宿 木	早 総 蕨 角	椎 橋 木 姫	竹 紅 匂 川 梅 宮 幻				御 夕 法 霧	鈴 横 虫 笛	柏 木	若 菜下	若 菜上	藤裏 葉	
九 一	一 七 九 一	三 三 六 八	三 一 一 二 八 四 四 二				一 六 九 四	一 二 三 五 〇 七		九 一 〇 九 〇		二 三	
八 九	一 七 九 〇	三 三 六 七	三 一 一 一 八 四 三 一				一 六 八 三	一 二 三 四 〇 五		九 九 九 九		二 三	
一	一	一	一				一	一	一	一	一		
一	ナシ	ナシ	ナシ				一	一		ナシ	ナシ	ナシ	

24	23
蜻蛉	東屋
五二	六一
五二	五九
	一
ナシ	一

25	手習
夢浮橋	六五
一九	六四
一八	一
	一

三 〈公条本〉の本文

本文文芸資料研究所の初代所長である阿部秋生博士には、小学館の旧版の日本古典文学全集本、同・完訳日本の古典、同『完本源氏物語』、明治書院の校注古典叢書、小学館の新紙日本古典文学全集本などの本文校定の業績があり、それらが信憑性あるテキストとして現在多方面において使われていることは贅言の必要もない。その校訂の際に『源氏物語大成』所収本の他に実践女子大学蔵〈明融本〉など一三本を用いたことが明示されているが、なぜか〈公条本〉が埒外に置かれ続けた理由については寡聞にして忖度する材料を持たない。ために、いま立ち入った憶測は避けておきたいが、山岸文庫蔵書については本誌『年報』などを通じて次々に報告がなされてきているものの、膨大な文庫全体の把握については、山岸家から移管される前後の「仮目録」と簡略な一覧「リスト」に纏められていたに過ぎなかった。従って該本が同文庫が整理され、その中から再認識、再発掘されたのは実に最近に属する事柄であった、とは現所長・野村精一教授による教示である。

山岸博士が岩波の旧大系を校訂する際に校異欄に「山」という略号で「堯空説書付公条本、山岸蔵」と紹介したのは、まさしく右に書誌を紹介した該本である。旧大系の校異欄に「山」の独自異文とされている箇所との照合によって判明す

る。ただ惜しむらくは、旧大系は専門に徹する編集方針でないにもかかわらず校異欄はかなり懇切に示されているが、『大成』の青表紙本系統の校異欄の詳細さに及ぶべくもないため、「山」単独の異文として記される項目には注意を要する。たとえば、桐壺の巻には「山」のみの項目は一八箇所（底本Ⅱ書陵部本と一致する一例を含めて）あるが、大系五〇頁3行目「御いきはひは―御いきはひ（山）」とあるのは〈公条本〉「御いきをひ」（第一冊・二四丁ウ9）の誤りであるし（以下の頁・行数などの表記は大系本のまま）、その他にも問題点が伏在する。たとえば、

①三八頁3なりはつるも―なり侍るも（底・山）

②三八頁15御かたみに―御かたみ（山）

③四一頁8ものし給ふ御かたにてことにもあらずおほしけちてもてなしたまふなるへし―ものし給なるへし（山）

④四六頁4いと―ナシ（山）

⑤五一頁7名は―名に（山）

とあるが、①の場合は実際は〈公条本〉「なりはつるも」（二二ウ）とある「はつる」を擦り消して「侍る」と上書きしてある。②は「御かたみに」（二三オ8）、③「ものし給御かたにて事にもあらずおほしけちてもてなし給なるへし」（一五ウ4〜6）、④「いと」、⑤は本行「名は」の「は」の左にミセケチの「と」、右に「に」と傍書する。つまり大系は本文を修正された後の形で校異を示している場合もあるのだ、ということを描きおきたい。

―と、こうして先人の業績に対して毛を吹いて疵を求めるのは、〈公条本〉本文がミセケチ・擦り消し・補入などのさまざまな修正がほどこされたものであり、それが必ずしも本行と同筆でない場合が存在することによって問題を複雑にしていることを確認したいがためなのである。

右記のような問題をより詳細に検証するため、大系本の総角の巻・校異欄における「山」と〈公条本〉の実際を取り上

げてみよう。恣意を避けるため、校異欄の同巻についての「山」表記に関わるすべての項目——「山」が明示されるものはもとより、「全」として「校訂用全本に共通する」項目も含めて——五七箇所を次に示しておこう。右に倣って、頁・行数は大系本のまま、丁数・表裏の区別・行数は〈公条本〉のそれを示すこととする。

①三八四頁7ものつよけけるは—ものつよけるは(全) ……4オ10「物つよけるハ」

②三八七頁5うれはしくも—うれしくも(山) ……6ウ4「うれはしくも」

③三九三頁2へたて—へたてゝ(全) ……11オ1「へたてて」(「へたて」で改行、二字目の「て」は行頭にある)

④三九三頁9たゝ世にたかひることにて—たゝ世になひきたる事にて(山) ……11オ7「たゝ世にたかひきたる事にて」

⑤三九五頁13まらと—まらうと(全) ……13オ1「まらうと」

⑥三九八頁9おとりさまならん—おとりまさらん(穂・蓬・後・山) ……14ウ7「をとりまならむ」

⑦四〇〇頁10すちは—すちには(全) ……16オ10「すちにハ」

⑧四〇一頁5けに—けにや(湖・山) ……16ウ10「けにや」

⑨四〇二頁11おはしますへけれ—おはしけれ(山) ……18オ2「おはしましけれ」

⑩四〇二頁16のたはせし—の給はせし(全) ……18オ7「の給ハせし」

⑪四〇四頁8みたてまつりし給へらん—みたてまつり給へらん(山) ……19ウ地「みたてまつり給へらん」

⑫四〇五頁5あらさりけりとみるいますこし—ナシ(穂・蓬・後・山) ……20オ6「あらさりけりとみゆ」

⑬四〇五頁13しそし—しましつ(山) ……20ウ6「しましつ」(「しそ」に「しす」を重ね書きする)

⑭四〇七頁16身もなけつへき—おなしくは(山) ……22オ2「。身もなけつへき」

⑮四〇八頁16やまひめに—山姫を(山) ……22ウ6「山姫に」

- ①六 四一〇頁 3 し給けり―し給ける (底・山) …… 23ウ 5 「し給ける」
- ①七 四一〇頁 15 思いてたまふにや―思出給宮 (湖・山) …… 24オ 9 「おもひ出給・みや」
- ①八 四一三頁 14 あやしきを―あやなきを (全) …… 26オ 9 「あやなきを」
- ①九 四一七頁 8 心からにうくそきゝたまふ―ナシ (全) …… 28ウ 4 ナシ
- ②〇 四一七頁 14 しめ給へり―しめり給へり (底・山) …… 29オ 3 「しめり給へり」
- ②一 四二〇頁 16 思給へり―思ひ給へり (全) …… 31オ 10 「おもひ給へり」
- ②二 四二二頁 5 あまたかけに―あまたかけこに (湖・山) …… 32ウ 1 「あまたかけこに」
- ②三 四二五頁 4 おほゆましき―おもふましき (全) …… 34ウ 3 「おもめましき」
- ②四 四二六頁 16 なきも―なきを (全) …… 35ウ 9 「なきを」
- ②五 四二七頁 1 なりもてゆく―…を (湖・蓬・後・山) …… 35ウ 10 「なりもて行を」(「を」は「をのかしゝ」の一部)
- ②六 四三〇頁 6 心―こと (湖・蓬・後・山) …… 38ウ 4 「事」
- ②七 四三二頁 7 さま―御さま (穂・蓬・後・山) …… 40オ 6 「御さま」
- ②八 四三二頁 11 つようしひて―つよししひて (全) …… 40オ 10 「つよししゐて」(「つよしし」で改行)
- ②九 四三六頁 8 中納言殿―中納言 (全) …… 42オ 8 「中納言」
- ③〇 四四〇頁 7 おもひいれられ―おもひいられ (湖・蓬・後・山) …… 46ウ 2 「思いられ」
- ③一 四四三頁 12 すさひ―すまひ (底・全) …… 49オ 7 「すまゐ」
- ③二 四四五頁 9 けにくゝは―けにくゝは (山) …… 50ウ 6 「け・^ににくゝは」
- ③三 四四六頁 14 身を―事を (山) …… 51ウ 6 「^事身を^ヒ」

- ③4 四四九頁 2 中宮―ひめ宮(吉・蓬・後・山)(底ハ「姫」ヲ見セ消チニシテ「中」トシテイル)……53オ1「中の姫宮」
- ③5 四四九頁 12 まりて―まさりて(全)……53ウ1「まさりて」
- ③6 四五〇頁 13 思いてきこえ給はんに―思給はんに(山)……54オ7「思給はんに」
- ③7 四五三頁 14 心うく―ナシ(湖・蓬・後・山)……56オ9ナシ
- ③8 四五四頁 5 との人―殿の人(山)……56ウ6「殿の人」
- ③9 四四五頁 6 すき侍へきにや―過侍りぬへきにや(全)……57オ10「過侍ぬへきにや」
- ④0 四四五頁 15 みたてなつり給へらん―みたてまつりなやみ給つらん(山)……57ウ7「みたてまつりなやみ給つらん」
- ④1 四五六頁 5 思て―思ひ出(全)……58オ4「思出」
- ④2 四五六頁 9 思ひ給へり―思ひぬ給へり(全)……58オ8「思ぬ給へり」
- ④3 四五八頁 9 物を―ナシ(山)……58ウ8ナシ
- ④4 四五九頁 4 みつへき―みはつへき(全)……60オ10「見はつへき」
- ④5 四五九頁 14 見たまへは―み奉れば(全)……60ウ9「見たてまつれハ」
- ④6 四六〇頁 10 こゝら―こゝちに(湖・蓬・後・山)……61ウ1「心ちに」
- ④7 四六一頁 3 思なから―思ひきこえなから(湖・蓬・後・山)……61ウ8「思きこえなから」
- ④8 四六二頁 4 おなしこと……と(湖・蓬・後・山)……62ウ7「おなしことム」
- ④9 四六三頁 12 思すてはつる―思ひすて侍(穂・山)……63ウ9「思すて侍る」
- ⑤0 四六四頁 7 こと―ことに(全)……64ウ2「ことに」
- ⑤1 四六四頁 10 おほえたまへさりしを―おほえたまはさりしを(底・山)……64ウ4「おほえ給はさりしを」

⑤四六五頁3とけぬる—とけぬか(底・吉・穂・蓬・後・山)……65オ4「とけぬか」

⑤四六六頁5汀のこほり月かけに—月かけに汀の水(山)……66オ2「みきはのこほり月影に・水」
汀の

⑤四六六頁10なけん—身もなけん(全)……66オ7「身もなけん」

⑤四七〇頁5思つらん—思給へらん(山)……68ウ8「思給へらん」

⑤四七一頁4夢のやう也—御わざもいかめしうせさせ給(湖・吉・蓬・山)……69ウ4「夢のやう也御わざもいかめ

しうせさせ給

⑤四七二頁5きこえたまひけるは—聞え給ひければ(全)……70オ9「きこえ給ければ」

この中でも「山」Ⅱ〈公条本〉の独自異文とされている項目に問題が存することは桐壺の巻と同じ。

②は『大成』によれば「をかしくもうれはしくも—をかしうもうれはしくも御池三」(二五九^⑧)とある箇所で、ウ音便化をめぐる旧稿のデータの一例となった部分でもあるが、大系本のような修正された結果の本文を示す限りにおいては「うれしくも」は青表紙本系では〈公条本〉の独自異文となるが、実際は「うれはしくも」と本行にあり、左に「ヒ」とミセケチにし、さらに「は」の字の中央に「ヒ」ともう一つのミセケチを記している。同様に④⑭⑮⑳㉑㉒㉓なども、本行自体をたどれば青表紙本本文の多数決原理の中に解消してゆかざるをえない。微妙に異なる⑨⑫⑬についても、〈公条本〉の⑨「おはしましけれ」という形は『大成』に異なる「おはしましけれ」(二六〇六^④)と同じでゆくし、⑫「あらさりけりとみゆ」は「あらさりけるとみるいますこし—ナシ御池三」(二六〇八^⑫)と交錯し、⑬「^{おなしくは}身もなけつへき」も異なる「身もなけつへき」(二六一〇^⑭)と重なる。

しかし、問題はミセケチや補入などの結果が文字どおりの〈公条本〉の独自異文なのかどうかではなからうか。②は、これも『大成』によれば別本に「うれしくも保」、⑫ナシとするのは河内本・別本「横保」、⑳は青表紙本「けにくくは

池」・河内本「七鳳」と、それぞれが関連する例であろう。③の「事を」ではたしかに独自異文だが、別本・平瀬本の「み」と（一六四七③）などと関係あるか。③は『大成』青表紙本系に異ならないが、河内本「月からにみきはのこほれるわたり」、別本「月かけにみきわのこほれるわたり保」「月かけにいとおもしろくみきはのこほれるわかり平」（以上一六四①）と近接する。〈公条本〉のミセケチに関してはさまざまな問題があるようだが、より詳細には別稿で考えたい。

また、〈公条本〉の異文の中には独自の誤写とおぼしき例もある。⑥は大系本校異では「おとりさまならん——おとりまさらん（穂・蓬・後・山）」とされて穂久邇文庫本・蓬左文庫本・書陵部後陽成帝等筆本とともに扱われているが、実見すれば「をとりま」（字母・満）な（字母・奈）らむ」とあり、『大成』の校異「おとりさまならむにて——おとりまさらんにて池三」（一六〇二⑤）と比較すれば、「ま」の前に「さ」が誤脱したか、「な」が「さ」を誤写したかと思える。さらに②⑤「なりもてゆく——を」（湖・蓬・後・山）は『湖月抄』以下の四本に「なりもてゆくを」とあることを示す表記だが、たしかに「公条本」には「なりもて行を」とあるものの、「を」は直後文の「::をのかしゝハ::」と続くもので、「成もてゆくを」をのがじゝ」とある『湖月抄』などと区別すべき誤認の例であった。

誤写は、皮相においてはたしかに誤謬ではないが、その根底には「本文」なるものを考える際に避けて通れない問題が介在することが多い。誤写とおぼしきは無数にあるが、もう一つ独自の例を通してその問題点を挙げておこう。総角の巻頭、八の宮の一周忌を迎える準備をする宇治邸の様子を叙する件りで〈公条本〉は次のように記す。改行なども原文のまま掲げてみよう（ただし書入れの注記引用は省略した）。

……………とみえたりミつからもまうて給ていまハとぬきすて

給ほと御とふらひ浅からすきこえ給あさりもこゝにミたりて
かくてもへぬる名香のいとひきミたりてかくてもへぬるなど打

かたらひ給ほとなり……………

ミセケチ部分が目を惹く。この〈公条本〉の形でも「ミたりて……」と「名^{ミヤウ}香の……」との目移りによる「誤写」修正の様相であることは「ミヤウ」の振り仮名が示唆している。同じ箇所を三条西家本から引いてみると、次のように問題は全く顕在化しない。

〔書陵部本〕

……と見えたりミつからも』（一オ）まうて給て今ハとぬきすて給「程の御とふらひあさからすぎこえ」給あさりもこゝにまいれりミやうかう」のいとひきミたりてかくても」へぬるなとうちかちらひたまふほと」なり……』（一ウ）

〔日本大学本〕

……と見えたりミつからもま」うてたまひていまはとぬきすて給ほと』（一オ）の御とふらひ浅からすぎこえ給あさりも」こゝにまいれりミやうかうのいとひきミたりてかくてもへるぬるなとうちかたらひ」給ほとなり……』（一ウ）ちなみに大島本は当該箇所「みやうかうのいとひきミたりてかくてもへるぬるなとうちかたらひ」給ほとなり……』（一ウ）やうかうのいとひきミたりて……」。活字体ではあるが『大成』でも仮名表記に異同が見えないところを参照すれば、現存諸本の源流に仮名表記が先行していた可能性がまず考えられよう。大島本などの「みやうかう……」「みたりて……」、あるいは書陵部本や『好聞抄』の「ミやうかう……」「ミたりて……」など字母を同じゅうする箇所はいかにも目移りを誘い出しそうな位置関係にもある。従って、仮名表記が先行していたとする可能性を是認するならば、〈公条本〉が筆写されるいづれかの段階で「名香」の漢字が宛てられたことになり、さらに目移りを顕示することによって当該本文の後、出性を表すことになる。その場合「ミヤウ」という振り仮名は、結果としては訓みを示しつつも、源流の本文を残すためになされたということにならう。しかし、問題なのは単なる「誤写」であるはずの箇所を修正した〈公条本〉の形態は、上記の大系

本校異の中にもあったミセケチ・補入・傍書等々とはほとんどえらぶところがない、ということなのだ。同系統諸本の参照によって説明がつこうがつくまいが、このような単純な「誤写」、書入れ・修正を含んだものが〈公条本〉という本なのだ、と了解する他ないのである。

四 〈公条本〉の注記

〈公条本〉には右記のような本行に対する書入れを有しているが、その他にもさまざまな注記傍書を見ることが出来る。そこに付せられる肩付・出典表記は「河（河海）」「花鳥」「細」「堯（堯空）」「紹永説」「宗（宗聞）」「源語（源吾）」「孝」「文」「コ」「或説」など多様であるが、『河海抄』『花鳥余情』『細流抄』については言うまでもあるまい。まず注目されるのが山岸徳平博士の端的な紹介にあった、「堯」「堯空」として記される堯空説である。上野英子の示教によれば、堯空説は桐壺・帚木・葵・宿木の四巻に明示されるという。「堯」「細」と区別されているように、『細流抄』の注文とは重ならないことが多い。桐壺の巻（第一冊）一七オ8「御をは北方」の注記「更衣母子祖母ノ事堯」が『細流抄』「更衣の母君源氏君祖母也」と近似するのがむしろ希少な例と言えるだろう。

①「桐壺」九オ9「ゆけいの命婦」……（「花鳥」引用の後10行目左余白に）「堯空曰 亦ユケイハ左右衛門ノ官ノ人ユキヲ、フ其人ノ娘ヲ云也業平戸ロニ弓ヤナクイヲイト云モシユノ事也其時右衛門ノ官也／私聞コ」

②「桐壺」一〇オ4「内侍のすけ」……（「内侍」に合点、4・5行間に）「内侍系図ノ外ノ人也前ニ度々更衣ノ母方ヘ御使ニ承リテ御返事ヲ奏シ給シヲ御前ニテ命婦聞テ其ヲ又言也 堯空」

③「帚木」四オ6「うはへはかりのなさけにてはしりかき」……（6行目左傍書として）「堯空の説てを書事也大かた

てなともきたなけなく書て事たかひたるやうなる人也」

④「帚木」ハウ 8「君たのかミなき御えらひにハ」……（8・9行間に）「堯説源氏也中将を云可然女世に無ヲ云」

⑤「宿木」五八ウ 2・3「水のをとのミやともにて」……（「水」「ミ」に合点、1・2行間に）「古へノ玉ノウテナモ

昔ニテ宮トモリナル草村ノ露 所ニ 宿宅ニテハナシ宮ト守也堯空説」

などの例は、堯空（実隆）説を称しながら『細流抄』にも、また〈公条本〉の名に由縁ある『明星抄』にも見えない注文であった。②例の「内侍のすけ」は、鞍負の命婦弔問の場面で先の訪問者として命婦の口から明らかにされる名だが、ここで「堯空説」は系図を引いており、桐壺の巻の別の箇所、桐壺帝や光に藤壺を紹介する二〇オ4行目「ないしのすけ」の所でも「内侍系図ノ外ノ人也前ニハタレニテモアレ只内侍ノスケト可見卷々ニ此類多シ何モ系図ノ外人ハ如此可心得堯」という。上記の例でもわかるように「堯空説」は必ずしも人物のみ施注するものではないが、該説が既成の注釈を引いたものでないとすれば、考証材料としていた「系図」なるものにも興味がそられる。公条の父は三条西実隆が古系図に飽きたらず自ら新たな『源氏物語系図』を作成し、諸家の求めに応じて何度もそれを書写していることを思い合わせるができるからである。実隆の系図は伊井春樹によって四種に分類されているが（『源氏物語注釈史の研究』桜楓社、一九八〇・一一刊、第五章第一節「実隆の『源氏物語系図』作成」、それとの相関については、「堯空説」はたとえば桐壺の巻だけでも一四例しかないというような希少な注記では推定困難と言つてよい。

そもそも「堯空説」とは何だろうか。実隆の資料蒐集の結果として『弄花抄』があり、また実隆の『源氏物語』講釈と公条の『聞書』とさらに実隆による整理を経て『細流抄』が成る経緯なども伊井春樹の著に詳しいが（前掲書、第五章第二節「実隆の源氏物語講釈と『細流抄』の成立」、堯空説」がそのまま『細流抄』でないことは、実隆の講釈との相関をめぐってこれも悩ましい問題である。山岸博士が「堯空説書入公条本」と紹介したのは〈公条本〉なる名称が前提にあ

って、公条の父・実隆の著述にない説が引かれていることを重視した呼称であるのか、あるいは「堯空説」が引かれるが故に〈公条本〉なる名称を付したのか、さらにまた山岸文庫の有に帰する以前の名称をそのまま用いたのか、今となつては詳細な事情が不明な点はもどかしい。ただし、〈公条本〉は『河海抄』『花鳥余情』はおろか「紹永説」「宗（宗聞）」「源語（源吾）」「孝」「文」「ユ」「或説」などまでさまざまな先行注釈（あるいは講釈）を、一回生起的ではないにせよ、集成しうる立場による本文であることはまちがいない。

「堯空説」以外の注記の傾向はどのようなものだろうか。以下、前節の本文考証に合わせて総角の巻を中心に挙例した。それぞれ本文とその所在（相当する『大成』頁行を併記した）を示した後、注文をゴチックで記し、当該本文に付せられる諸注釈の注記を対比させてみたい。

①一四オ2「かの人」（一六〇一）⑦↓（右注記）「薰」／（左注記）「大君也」

〔弄花抄〕薰也

〔細流抄〕大君也

〔明星抄〕大君也

〔萬水一露〕薰の心也彼人とは姫君の事也

〔岷江入楚〕秘かの人は大君なり

私か的人是薰也つゝみ給ひし藤の衣は一夜の時大君の藤のやつれを見あらはされしをつゝみたまひし
事也

後文に「かの人、つゝみきこえ給し藤の衣もあらため給へらんが月もしづ心なくて、又おはしたり」と続く部分で、「藤の衣もあらため給へらん」で大君の状況を薰が思いやる文脈であり、現行の注釈では「かの人」の直後に読点を打

って、「おはしたり」の主語として薫と読んでいるが、古注では右のように両説あったらしい。三条西家の読解でも薫と大君の両者に揺れていて、『弄花抄』では「薫」としたものの『細流抄』以下では「大君」に変じてしまい、公条の孫・中院通勝の私説によってようやく「大君」説に回帰する。三条西家内の読みの歴史が、両説併記のかたちに残された。そうした一例として挙げる価値があるだろう。

②一五オ9「やうのものとすく(し)給はんも」(一六〇三②)↓「様力マシキト云心敷上ノ言ニヨリ所ニ随テ心得ヘシ
河海／異様の物あやしきハ也或本細云おなしやうの物と也

〔河海抄〕様かましきといふ心敷かみのことはにつきて「真本より」所にしたかひて心得へし

〔花鳥余情〕やうの物といふ詞河海に様かましき心にいへるこゝのことはゝやうかましきかたへも心かなひ侍れと下の詞にさるへき人もをくれたてまつらめやうの物とありそれはやうかましき心にはかなひ侍らず又河海に上の詞により所にしたかひて心得へしといへる此注はしかるへく覚え侍りやうの物はたゝさ様の物といふ心也手習の巻にあやしきやうの物とありそのほか所々にみえたりかれこれをかよはして心得へきなり

〔一葉抄〕おなしやうの物と也姉君の中君をわれとおなしやうにはいかゝとの給也

〔弄花抄〕一やうに中君も山居あるましき事と也

〔細流抄〕おなしやうの物と也

〔明星抄〕おなしやうのものと也

〔孟津抄〕やうの物とは中君と同やうにしてましませはと大君詞也

〔岷江入楚〕河やうかましきといふ心敷かみの詞又所にしたかひて心得へし

秘おなしやうの物と也箋

花やうの物といふ詞河海に様かましき心にいへるこゝの詞はやうかましきかたへもこゝろかなひ侍れと下の詞にさるへき人もくれたて奉らめやうの物とありそれはやうかましき心にはかなひ侍らす又河海に上の詞により所にしたかひて心得へしといへる此註はしかるへくおほえ侍るやうの物はたゞさやうの物といふ心也手習卷にあやしくやうの物とあり僅他所々に見えたりかれこれをかよはして心得へき也

私此ことはあまた所に侍れと大略一樣の物といふにかなへりよく／＼心をつけて見るへし

「河海」という尻付、「細云」という引用明示の部分については、右の通り問題はない。ただし「異様の物あやしきハ也」という「或本」の説は右に挙げた中には該当するものは見当たらないようだ。「或説」「或注」などでなく「或本」とあるところに惹かれるものがある。〈公条本〉あるいは〈明融本〉・大島本など書入れを有する「本」はかように惹くに値する形態である。たゞし実体は「或説」などとともに、現在のところ課題として積み残すしかない。

③四〇ウ4 「つねよりも我おもかけにはつるころなれは」(一六三三⑬) ↓「御覽しすてんもさすかなと也 此比ハ事の外に衰たると也 此詞宇治十帖の内第一の詞と云々」

〔細流抄〕御覽しすてんもさすかなと也

〔明星抄〕御覽し捨てんもさすかなと也

〔孟津抄〕宇治十帖の内第一ノ詞と云也

夢はたにみゆとはみえし朝なく我面かけにはつる身なれは

この哥ことに感あり

〔岷江入楚〕 馴まるらせんとは思はぬものからみにくゝおはされんを見えんはさすかくるしきとあひしらしたる詞なり
おもしろうとましと御らんしすてんもさすかなるとなり

『源氏物語』明石の巻「月入れたるま木の戸くちけしきはかりをしあけたり」（公条本による）に対する『花鳥余情』の一節「源氏第一の詞と定家卿は申侍るとかや」は有名な蓮言だが、ここの「此詞宇治十帖の内第一の詞」はそれに対応する評言として記憶さるべきものであらう。概念自体は溯るものであらうが「宇治十帖」の呼称は、これも『花鳥余情』あたりに端を発する。そして「我おもかげにはつるころ……」を「宇治十帖の内第一の詞」と評したのは三条西家学の祖・実隆あたりからなのであらう。〈公条本〉に相応しい引用というべきである。

④四三才5 「海仙楽といふ物を」（一六三七二） ↓「海仙楽近代海青楽黄鐘調 源吾」

〔河海抄〕海仙楽 又海青楽 黄鐘調

〔岷江入楚〕 秘河 海仙楽 又海青楽 黄鐘調也水辺によせたり

「源吾」は「源語」「吾」なども表記され、師成親王の手になる『源氏物語』のいろは引き辞典『源語類字抄』（一四三一成）を指すことが明らかになった（落合博志の示教による）。師成親王の兄・長慶天皇の『仙源抄』（一三八一成）の影響のもとに成り、また近世に至って『統源語類字抄』（一六三九成）が猪苗代兼也によって編まれており、いずれも記事において重なり合う部分が少なくない。当該箇所を三者で比較してみれば以下の通り（岩坪健編『仙源抄・源語類字抄・統源語類字抄』〈源氏物語古注集成21、おうふう、一九九八・二刊〉の本文・解題による）、落合博志の見通しの正しさを証明している。

〔仙源抄〕 海仙楽 海青楽近代海青楽黄鐘調

〔源語類字抄〕 かいせむらく 海山楽近代海青楽黄鐘調

〔統源語類字抄〕 かいせんらく 海山楽近代海青楽なり

この「源語」の引用は劈頭・桐壺の巻以降、いくつかの巻を隔てながらも〈公条本〉のほぼ全体に施注されている。しかし、「源語」Ⅱ『源語類字抄』と断じ切ることとはできない。むしろ右の三書の中で「源語」Ⅱ『源語類字抄』の類と理解すべきであるらしく、例えば（以下傍線は稿者の私意）、

⑤ 桐壺二一ウ 5 「なつさひ」(二三⑪) ↓「昵近 源語有」

〔仙 源 抄〕 なつさひ 昵近也

〔源語類字抄〕 ナシ

〔統源語類字抄〕 なつさへ 同なるゝ心也 眼近^{ナツサヘ} 親同昵

⑥ 桐壺二一ウ 「にげなからず」(二三⑬) ↓「無何気 無人間 ホムル言ニモ ニツカワシク宜ト云言歟源語」

〔仙 源 抄〕 にげなからず 不無人間私云非無似氣歟是は相似たりよし也

〔源語類字抄〕 にげなく 無似氣無人間私云スコシホムル詞ニモイヘリニケナカラストモ宣詞歟

〔統源語類字抄〕 にげなき 似合ぬ事也無似氣にけなからずは似合たる也不無似氣也

⑦ 同二二オ 1 「こよなう」(二三④) ↓「無此世也源語 無儀幽玄義也限モナクノ心モアル也 同 源語」

〔仙 源 抄〕 こよなう 無此世也又無超也又閑雅也たとへはことのほかといふ心なるへしウルセクト云同

〔源語類字抄〕 こよなう 無越閑雅^{コヨナウ} 幽玄ノ義也

〔統源語類字抄〕 こよなく 同ことの外と云心幽玄の義也無越^{コヨナク}

など、『仙源抄』『統源語類字抄』などと交錯しつつ、しかも⑥の「無何気」、⑦「無儀」という〈公条本〉自体の誤写の

可能性を含有して『源語類字抄』一書に限定しうるわけではない例であることを示している。ただし、岩坪健の調査・解題によれば『源語類字抄』の伝本には『仙源抄』を追加・混合したものもあり、『仙源抄』と『源語類字抄』を三条西実澄が類纂した」（岩坪前掲書、三四九頁）『水滴色葉類聚抄』のような本も視野に入れば、『源語類字抄』の類」と事改めて称するまでもないのかも知れないが、『源語類字抄』の広本系統の成立年代（一五〇二年）、類従本『仙源抄』の成立（一五七三年）と三条西家本『源氏物語』書写年代などの近接について興味深い、いまは指摘するにとどめておく。

五 暫定的な結びとして

ひと世代・ふた世代前であれば当然のこと、時間の経過とともに忘却されることもあろうし、あるいは現在でも識者には当然であろうところを戸惑うことがある。本稿は岩波古典大系本の「堯空説書入公条本」の記載の裏打ちとなる謎を模索するだけで紙数を費やしてしまった。大系本の校異欄にはまだ他にも「蓬—天文二年写三条西公条本、蓬左文庫」という記載も私には謎である。この記載が正しければこれも「公条本」と呼ぶのに相応しい。しかし、管見の及ぶかぎりでは、蓬左文庫にはたしかに天文二年（一五三三）書写の伝本を蔵するが、

此物語五十四帖相公羽林康世卿借當時男女之手

終一部之書功須為万代不朽之家宝而已

天文癸巳曆季夏下澣侯老比丘堯空書

と奥書にある由であり、『蓬左文庫・源氏物語図録』名古屋市蓬左文庫、一九七八・一〇刊、二〇頁）、「伝・伏見宮貞敦親

王等寄合書」として扱われている。「公条」を「実隆」の誤記・誤認と考えれば簡単だが、果たして安易な解決で済ませてよいものか。池田利夫の挙げる例（前掲『源氏物語の文献学的研究序説』二八―二九頁）をなぞれば、日本大学に蔵された三条西家本が夕霧の巻を欠くはずなのに『大成』夕霧に「三」として何の断りもなく校異が挙げられる問題点、岩波古典大系本の第一巻では『大成』掲出以外の有力な諸本の校異を掲げていたのが、第二巻以降いきなり「特に重要と思われるものだけ」になってしまった方針変更の問題点など。さほど昔のことでないにも関わらず、稿者のような詳しい事情を知らない者が増えつつある現在、戸惑う問題点はいくらでもある。微妙な人間関係、物理的問題などが存するのであるが、後代のために識者はご教示戴きたいものである。

本稿は〈公条本〉の戸口に立つために片づけておかねばならぬ基礎的問題の一部を並べただけに過ぎない。積み残した課題は多い。たとえば「紹永説」。おもな例を挙げれば、

- (1) 「明石」二一ウ5（巻間の遊紙を挟んで、第七冊・通し丁数四三ウ）「ゆくりかに」……（4・5行間から5・6行間にかけて）「不意也日本記ユクエ無也亦云氣アヌ心也大和物語ニモ見ヘタリユクリカニト云モ同心也愚案ユクリカユクリナクワ不相違ユクエナキト云説不叶下説可用之紹永説」

- (2) 「常夏」一五オ1（第一二冊・二六オ）「てうたぬ心ちし侍れと」……（1・2行間から2・3行間にかけて）「心元ナキ心也人ヲ呼トテ手ヲ打ハ心元ナカルマシキ心也愚案此注難信手ウツ、ホコリ悦方也持悦ト消息ニ書侍ノモ此心可成持悦トツカウモ悦舞ノ左也持ヲ手ウツト讀也亦真言師行注ニ拍掌心トテ手ウツモ觀喜ノ心トッ申ノ侍メル 紹永説」

- (3) 「蜻蛉」三七ウ6（巻間の遊紙を挟んで、第二四冊・一〇三ウ）「うす物」……（5・6行間に）「羅也 紹永説」

など。右のように「昭永」とも表記される例もあるが、初稿本系の松永鵬蔵『花鳥余情』奥書に見える紹永と同一人物であらう。すなわち、摘記すれば、

第一冊（卷二末）奥書

此抄者禪閣兼良公御抄也此道之珍璧末

代之龜鏡更以不可令陵爾可貴可重而

已予閑暇之時分以紹永本連々終書功追可

校達者也一部書写之藏有之

文明九載正月 日 岐陽隱叟藤（花押）

第三冊（卷六末）奥書

花鳥余情源氏物語秘抄後成恩寺准后

兼良公御法名惠覺惠新撰編集書也此道之

珍璧末代之龜鏡歟有前后二本文々句々

小異大同昔年令借用紹永法眼連々終書

功件本最可本也近來此邦依兩虎鬪戰

予東漂西泊要膝之處此頃寓居源益盛

甲第以閑暇披見此抄之處第三卷有不庶

幾之子細追教改之凡於此御抄不可出窓外

最以可秘之云々

明応七年五月二日記之 儀同三司

第一五冊（卷三十末）奥書・一部

花鳥余情全部紹永法眼加書写之条

最以数奇之至不堪感悦者也

小春中瀚

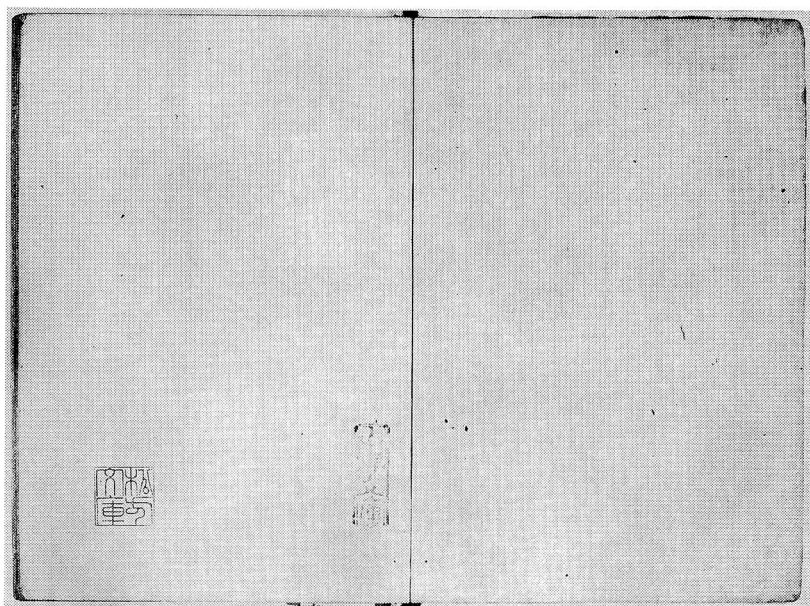
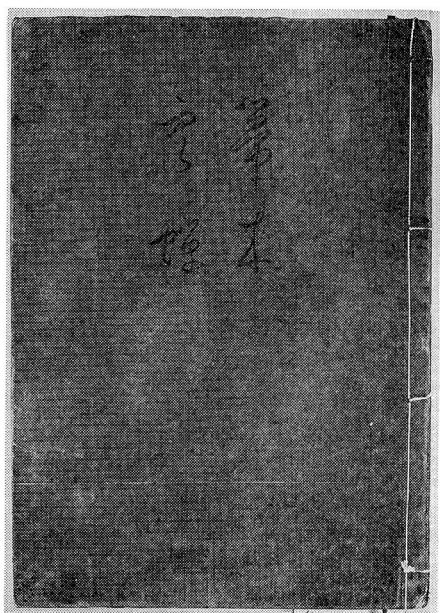
沙門御判

とあるそれである。兼良が脱稿した『花鳥余情』初稿を紹永が整理し浄書した、という。美濃在住の紹永と兼良との接点は未詳であるが、その「幹旋したのは、宗祇ではなかっただろうか」と伊井春樹は推測する（前掲『源氏物語注釈史の研究』二一六頁）。宗祇自身の『源氏物語』注釈との関係については、いまさらいうまでもないが、中間項としての宗祇の存在は、連歌師たちの物語文学の表現への関心という一般論を超えて、紹永自身の『源氏』研究を促すものとして看過しがたい。「宗」「宗聞」ほどではないにせよ「紹永説」がそれに併存し散見するということは、〈公条本〉本文・注記の伝流過程を示唆する貴重な証言である可能性があると見ることができるだろう。

〈公条本〉という呼称と本文系統の問題、上記に触れなかった注記「孝」「文」「コ」「或説」の解明の問題などなど。続稿を期したい。

〔付記〕

本号には第二冊「帚木・空蟬」の影印を付した。桐壺の本文については、本年六月刊行の王朝物語研究会編（横井責任編集）『論叢源氏物語1——本文の様相』（新典社刊）に上野英子との共同作業による翻刻を掲載する予定である。該書のそれと本稿は平成一〇年度文部省科学研究費助成（基盤研究（C）—(1)10610423）による。



[illegible][illegible]

けりし （一） 下 （二） の （三） 地 （四） へ （五） 下 （六） へ （七） 下 （八） へ （九） 下 （一〇） へ （一一） 下 （一二） へ （一三） 下 （一四） へ （一五） 下 （一六） へ （一七） 下 （一八） へ （一九） 下 （二〇） へ （二一） 下 （二二） へ （二三） 下 （二四） へ （二五） 下 （二六） へ （二七） 下 （二八） へ （二九） 下 （三〇） へ （三一） 下 （三二） へ （三三） 下 （三四） へ （三五） 下 （三六） へ （三七） 下 （三八） へ （三九） 下 （四〇） へ （四一） 下 （四二） へ （四三） 下 （四四） へ （四五） 下 （四六） へ （四七） 下 （四八） へ （四九） 下 （五〇） へ （五一） 下 （五二） へ （五三） 下 （五四） へ （五五） 下 （五六） へ （五七） 下 （五八） へ （五九） 下 （六〇） へ （六一） 下 （六二） へ （六三） 下 （六四） へ （六五） 下 （六六） へ （六七） 下 （六八） へ （六九） 下 （七〇） へ （七一） 下 （七二） へ （七三） 下 （七四） へ （七五） 下 （七六） へ （七七） 下 （七八） へ （七九） 下 （八〇） へ （八一） 下 （八二） へ （八三） 下 （八四） へ （八五） 下 （八六） へ （八七） 下 （八八） へ （八九） 下 （九〇） へ （九一） 下 （九二） へ （九三） 下 （九四） へ （九五） 下 （九六） へ （九七） 下 （九八） へ （九九） 下 （一〇〇） へ

[illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible]

一、^{（一）} ^{（二）} ^{（三）} ^{（四）} ^{（五）} ^{（六）} ^{（七）} ^{（八）} ^{（九）} ^{（十）} ^{（十一）} ^{（十二）} ^{（十三）} ^{（十四）} ^{（十五）} ^{（十六）} ^{（十七）} ^{（十八）} ^{（十九）} ^{（二十）} ^{（二十一）} ^{（二十二）} ^{（二十三）} ^{（二十四）} ^{（二十五）} ^{（二十六）} ^{（二十七）} ^{（二十八）} ^{（二十九）} ^{（三十）} ^{（三十一）} ^{（三十二）} ^{（三十三）} ^{（三十四）} ^{（三十五）} ^{（三十六）} ^{（三十七）} ^{（三十八）} ^{（三十九）} ^{（四十）} ^{（四十一）} ^{（四十二）} ^{（四十三）} ^{（四十四）} ^{（四十五）} ^{（四十六）} ^{（四十七）} ^{（四十八）} ^{（四十九）} ^{（五十）} ^{（五十一）} ^{（五十二）} ^{（五十三）} ^{（五十四）} ^{（五十五）} ^{（五十六）} ^{（五十七）} ^{（五十八）} ^{（五十九）} ^{（六十）} ^{（六十一）} ^{（六十二）} ^{（六十三）} ^{（六十四）} ^{（六十五）} ^{（六十六）} ^{（六十七）} ^{（六十八）} ^{（六十九）} ^{（七十）} ^{（七十一）} ^{（七十二）} ^{（七十三）} ^{（七十四）} ^{（七十五）} ^{（七十六）} ^{（七十七）} ^{（七十八）} ^{（七十九）} ^{（八十）} ^{（八十一）} ^{（八十二）} ^{（八十三）} ^{（八十四）} ^{（八十五）} ^{（八十六）} ^{（八十七）} ^{（八十八）} ^{（八十九）} ^{（九十）} ^{（九十一）} ^{（九十二）} ^{（九十三）} ^{（九十四）} ^{（九十五）} ^{（九十六）} ^{（九十七）} ^{（九十八）} ^{（九十九）} ^{（一百）}



細

泰元の前年之うゝの横監の事何處にもを
 いたしずち尋ねばなつて之監の垂たへ
 細く其の事史記に於ては列傳とて之を
 又叙すべしと云

[illegible][illegible][illegible]

[illegible][illegible][illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

